

高橋史朗先生の基調講演「親子の絆を深める親守詩」

昨晩は、「朝まで生テレビ」に出演しておりました。安倍政権になって大きな動きがで
ております。特にいじめ問題、体罰問題ですね。これが（番組の）最初に半分以上の時間
を使ったのでしょうか。3 時間したのですが、大半がこの問題になりました。

この問題の根っこに何があるかというのが実は大事でありまして、いじめは 3 歳で発見
できる、というのが中曽根総理のときの臨時教育審議会のときの報告書にあります。なぜ
3 歳かといいますと、共感性とか恥とか罪悪感というのが育ってくる年齢は 2 歳の終わり
だというんですね。これがハーバード大学のカガンという先生の見解です。あるいは、善
悪を獲得するのは 3 歳の始め—そういう発達のタイミングというのがあるのです。

今、親学推進議員連盟ができておりまして、その会長は安倍総理、事務局長は下村博文
文部科学大臣でございます。その議員連盟が全国の県にも広がっておりますが、昨日は鹿
児島で勉強会をしました。議員の方が家庭教育支援条例を 6 月議会でやりたいというので、
熊本でも 12 月にできているんですが、熊本に続いて鹿児島が手を挙げまして、多分 6 月議
会で条例が通るんじゃないかと思えます。なぜこういう動きが全国にできているかと言
いますと、親が親として成長することを支援する、こういうことが大事だ。昨日もテレビの
中で申し上げたのですが、マリー・ウィンという方が、『子供時代を失った子供たち』と
いう本を書いていまして、その中で、「子供のために犠牲になる親はいなくなった」そして
「家庭というのは心理的居場所、あるいは砦、あるいは避難場所」と書いてあるんですが、「今
や家庭は子供にとって避難場所でも砦でもなくなっている」と。これアメリカのことを言っ
ているのです。

私は小さいころ腕白坊主でしょっちゅう廊下に立たされました。今でいう体罰—廊下で
バケツを持ってじい—と立っていた—を思い出すんですけど。そしていつも川に行っ
て石を投げながら先生の悪口を言っておりましたが、母親が「史朗。史朗」と迎えに来て、
飛び込んでいって母の元で大泣きました。まさにそれが母性すなわち、避難場所ですね。さ
みしいとき、悲しいときに母のふところに飛び込んでそこから飛び立って行った。いわば
それが砦、人生の基地と言ってもいいのです。

そういう親と子との絆が一番大事になるのですね。これを大平正芳元総理は、家庭基盤
を充実させないといけない、日本は今から福祉社会に向けてまず家庭基盤を充実して、家
庭がしっかりまず基盤を作り上げて、そして地域全体でそれを支えて、行政が支えるんだ
と。「自助、共助、公助」という順序をしっかり立てないといけないと言われたのですが、
30 年ぶりにそのことを自民党が政権公約に盛り込みました。

去年の秋、お隣の香川県で親守詩大会がありました。第 6 回でした。もともと親守詩は

松山青年会議所からスタートしました。ですからみなさん、ここが発祥の地であります。

経緯を申し上げますと、親学～親が変われば子が変わる、ということを私がずっと講演会しているのですが、その講演の打ち合わせで松山青年会議所の方が東京にお見えになってお酒を飲みながら打ち合わせをしていたのです。親が変われば子が変わる、という話をしていましたら、そのときにどういう話が出たかといいますと、「いや、先生。親は年を取っているから変わらないじゃないか。子が変われば親が変わるんじゃないか」と。

これは大変大きなヒントをいただきました。これまでは親が変われば子が変わる、と頭で考えていたのですが、子が変わることによって親が変わる。これも大事だ。両方が大事なのですね。親が変われば子が変わる、子が変われば親が変わる。子が変わるというのはどういうことか。例えば、親学アドバイザーになっている方に大阪の熱心な方がいらっしゃいます。この方は虐待しながら、どうしても虐待することに苦しんでいたのです。けれども娘と一対一で自分の誕生祝いをしたときに、娘がどういうことと言ったかと言いますと、「私を生んでくれてありがとう」。自分が虐待をして苦しめてきたはずなのに、娘は自分が大好き。どんなに虐待を受けても子供が親を思う気持ちは変わらない。その娘の心に打たれて親心を取り戻したといいます。

(江戸時代に来日した外国人の言葉を集めた)『逝きし日の面影』。外国の方がやってきて日本の子供は笑顔が輝いている、そして大変いいことばがあるわけなのですが、子供の笑顔が大人たちを天国に導いている、という表現があるのです。大人が子供を天国に導いてやるんじゃないくて、子供の無邪気で素朴で笑顔あふれる表情が大人たちを、親たちをおじいちゃんおばあちゃんを地域の人たちを天国に導く、つまり、子供が大人を助ける、子供が天国に導いてくれる。私は江戸の『逝きし日の思い影』第10章「子供の樂園」から逆にそういうヒントをいただいて、そして松山青年会議所のみなさんから、子供が変われば親が変わる、いうヒントをいただいて、これは子供と親が心を通わせながらお互いともに育っていくということが大事なことではないか、そんなふうになるようになりました。

松山青年会議所でやったときは、私も「詩ってできる親孝行」というTシャツを着たのを覚えておるのですが、三宅県議もよく知っておられると思いますが、ちょっと恥ずかしかったです。「詩ってできる親孝行」というTシャツで講演したことがありませんので。そして、町で歌っている若者たちがたくさん応募してきました、今でも覚えています。大変感動的な歌詞とメロディーでした。

親守詩は「詩」を「うた」と読んでいるわけです。子守唄は口へんに貝です。親守詩はなぜ「詩」にしているかといいますと、単なる子守唄の唄ではなくて、さまざまな、たとえば、香川県の場合は、今日もモラロジーのみなさんに支えていただいていると思いますが、この松山青年会議所の3年間の取り組みをみていた香川県モラロジーの青年部の方たちが、ぜひ香川県にも広げたいということで、香川県には教師の組織(香川県教職員連盟)もございまして、その先生方と協力して、小学校、中学校をずーっと回っていただきました。

ここにはエッセイ・俳句作品集があります。ですから、エッセイと俳句が中心になって香川県の場合は広がりました。

第6回のを私は読ませていただいて大変感動しました。今日のみなさんの作品にも感動しましたが、いちばん感動したのは実はこういう作品でした。『“うっとうしい”を越えての絆』という中学1年生の女の子の書いたエッセイです。

「女の子ってめんどくさい。そう思ったのは中学校に入ってすぐだった。トイレに行くのにも教室移動のときも登下校もずっと一緒にいないといけない。たまにはひとりでいたいときもあるのに。ある日私はそんな思いをママにぶつけてみた。するとママはお皿洗いをしていた手を止めて、ここに絆って字を書いてごらんといいました」

これが絆ですね。これを中学校1年の娘に書いてごらんといいました、ホワイトボードに書いてもらったのです。お母さんが横に「し」という送りなをふった。このお母さんさうとう教養があった。これ、「ほだし」といいます。どういう意味かという、ママがこう言ったというんですね。「ほだしというのはうっとうしいという意味なんだよ。ほだしを乗り越えて絆を作るんだよ」とママが言ったというんですね。これなかなか深いです。「絆しを乗り越えて絆きずなを作るんだよ」といいました。心がすっきりしたような気がする。ママありがとう。だから私はそんな関係を友達と作りたい。ママと私のように。」

特に東日本大震災を機にいろいろ絆ということばが言われるようになりました。民主党政権でも自民政権でも、絆のある社会ということばを言います。でも世の中は絆の意味を誤解しています。どういう誤解をしているかという、絆のある社会というのは、社会がモノを与えてくれる社会ではなくて、絆というのは実は馬が逃げないようにつなぎ止める道具、つまり束縛することなのです。たとえば、育児にしても介護にしても、それはある意味うっとうしい、煩わしいことです。でもそれを抜きにして、行政がお金を出して、そして支えてくれるというのが絆のある社会ではなくて、その与えることが絆につながっていくのです。

曾野綾子さんが産経新聞の正論にお書きになった文章が、一番そのことを表現しているので紹介したいのですが、絆の意味について曾野綾子さんはこう言っておられます。曾野綾子さんは今度の教育再生実行会議の委員にも入りました。その前の小渕政権の教育改革国民会議にも入りました。その前の中曽根政権の臨教審にも入りました。3人の総理大臣の審議会に名を連ねているのは曾野綾子さんしかおられないですね。この方は非常に率直に、しかも歯に衣を着せないでズバツと本質をおっしゃるので胸に迫るものがあります。

「絆の第一歩は年老いた親や親戚や友人を災害のときには引き受けることだ。そもそも絆の基本は親と同居することだ。絆はそれによって得をするものではない。相手のすべての属性を受け入れることだ。絆の相手が、金銭や物質の面で気前よく心遣いもやさしく物

わかりよく礼儀正しい人ばかりではない。ケチで感謝もなくずうずうしく自分勝手な人もいる。それらの美点も難点も受け入れることが、絆を大切に思う知性というものだろう。絆を求める心は、自分に何かを与えてくれる人を期待しているとしたらそれは間違いだ。絆はむしろ、苦しむ相手を励まし、労働によって相手を助け、親切に語り、当然金銭的な援助さえもすることなのである。自分が与える側にまわることを覚悟するとき、人は初めて絆の中に立つ。本物の絆は相手のために傷つき、血を流し、ときには相手のために死ぬことだと私は習った。絆は自分の利益のために求めるものではない。むしろ、自分の安全や利益などを捨てたときに人間の絆の深さを示して輝くのである」

そして最後に、「東日本大震災を人間性復活の贈り物に」という見出しで最後をこう締めくくっておられます。

「悲惨な地震と津波は濃密な現世に我々を引き戻した。われわれの人間性復活のための大きな贈り物と考えたい」

こういうようにお書きになりました。

ちょうどその新聞の横に、今年の元旦の産経新聞の記事ですが、『親が死ぬまでにしたいこと（親孝行実行委員会編）』という本がベストセラーになっている、と書いてあります。地震後両親のことを考える機会が増えた。親孝行しようと思う。普段あまり親孝行していないが、震災を機に親孝行を意識しないといけないと思った。プロデューサーによれば「若い世代の親孝行への関心が震災を機に再び高まっている。親孝行に関するエピソードを募集したところ、想像を超える声が寄せられた。とくに両親を亡くした人たちからの反響は大きかった」

親を失ってその重大性、深さに気付くということでしょうか。

今、子と離れて暮らす親が60歳で、残された寿命は20年と仮定すると、1年に会う日数は正月やお盆の6日間で、1日に一緒にいる時間を11時間とすると、計1320時間、つまり親と子が一緒に過ごせる日数はあと55日間。余命2ヶ月足らずの短さです。普段親孝行をしていない、これは六本木に多い。親孝行を考えることの少ない六本木の書店でこの本が売れ行きが高いといえます。

実は東京では六本木ヒルズアリーナというところで、昨年親守詩の講演をしました。島谷ひとみさんという歌手を呼んで、ほんとは即興で親守詩にメロディーをつけて欲しかったのですが、即興は無理でしたね。気仙沼の青年会議所もテレビ朝日が中継で結び親守詩の大会をやりまして、昨年5月に私が行って、どういうふうに入れるかのお話もしたのですが、気仙沼青年会議所もこういう冊子を作りました。今年もやりたいと言って、被災地でもこの親守詩の動きが大変広がっております。審査委員長賞はこういう作品です。「病床の母に聞かせる子守唄」。

私は子守唄と親守詩というのは非常に「つながるもの」があると思うのです。お母さんに子守唄を唄ってもらって、その思いを今度は病床に伏せているお母さんに聞かせてあげたい。それは非常につながっている。母守唄ということばもあるのですけれど、その子守唄、親守詩というのは深いつながりがあるものだと私は思っております。

それから、家庭科の教科書に私は注目しておりまして、家庭科の教科書にあることきこういう教科書があったのですね。

「専業主婦として日中子供と過ごす母親の中には、生きがいが子供だけになり、一方で孤立感や苛立ちをつのらせる人もいます。子供も友達関係が築けなくなる」

今、親学が専門学校にも広がりつつあります。愛媛県では河原学園が手を挙げられました。そして先日 50 人の研修会をしました。専門学校に親学が正規の科目に入ってシラバスも作って、親になる前に親になるための学習をするということが、まず専門学校から大学に広がっていきこうとしております。そしてそれが本来であれば、小学校、中学校、高等学校で行う必要があります。親になる前に親になるということについて学んでいく、そういうことが今求められている時代になってきているのではないかと思います。

それを全国に広げようというのが、家庭教育支援法とか、家庭教育支援条例でもあります。今朝もテレビで申し上げたのですが、江戸時代の子供たちの様子を外国人の人たちがこういうふうに表示しているわけです。

「日本は子供の天国である。世界で日本ほど子供が親切に取り扱われている、子供の姿に深い注意が払われる国はない。赤ん坊が泣き叫ぶのを聞くことはめったになく、母親が赤ん坊に対して癩癩を起こしているのをみたことがない。日本の子供が泣かないのは、刑罰もなく咎められることもなく、叱られることもなく、うるさくぐずぐず言われることもないからだ」と。「日本の子供はおののいたり、罰を受けたり、くどくど小言を聞かされたりせずとも、好ましい態度を身につけている」つまり笑顔に溢れていた。

その子供が今、世界一孤独になったのです。これは 2007 年のユニセフのイノチェンティ研究所の子供の幸福度調査で、15 歳で孤独を感じる、と答えたのが日本は 30% で断トツなのです。次はアイスランドの 10%。他の 25 か国はすべて 1 桁ですね。

世界一幸せで笑顔が溢れていた子供がなぜ世界一孤独になってしまったのか。家庭と学校と地域社会という、日本はこの 3 つが連携して子供を育ててきたんです。それを『家庭心得』では、「教育の道は家庭の教えで芽が出て、学校の教えで花が咲いて、世間の教えで実が成る」と教えてきました。ところが、今、家庭の教えで芽が出ないのです。たとえば、なぜいじめが今こんなに起きているか、一番根本にある問題は、共感性というものと、それから規範意識の欠如の問題なのです。この 2 つが家庭で育っていない。このことがいじめの根っこになる問題です。

私が国会議員の勉強会で 3 回提言したのですが、すぐにいじめ防止対策基本法を作るべきだということを提言しました。一刻も早く子供を救わないといけない。埼玉県で調査したら、いじめられても親にも教師にも相談しないと答えたのが 39%。これは大変なことです。約 4 割の子供が親にも教師にも相談しない。つまり、親に相談しても教師に相談しても本気で守ってくれない。本気度が問われているのです。

その背景にはいじめをどうとらえるか、あるいは体罰をどうとらえるかということにつ

いて混乱があるんですね。どういうことかと言いますと、最近増えているいじめは、たとえば、カツアゲとかパシリ（使い走り）。そういう恐喝とか強要とか暴力とか、こういうものがどんどん増えてきた。警察庁がいじめを摘発したらこういうのが 2,3 倍に増えたという新聞に載っていました。こういうものはもう犯罪なのです。ところが世間では、私も昔臨教審で海外を回ったときに、各国で活躍している日本人は何と言ったかと言いますと、いじめはどこの世界にもあって、軍隊でもいじめがあるし、子供はいじめを通して大きくなるんだからそんなに目くじらを立てることはないんだよ、と。でも、その「いじめ」と自殺するくらいまでにいじめる「いじめ」は全然違うのです。そして家庭で、学校で、いじめは絶対に許されないということを親がしっかり言わないといけない。学校の先生がきちり言わないといけない。でもそのことが曖昧になっている。特に、親子に共通の価値規範が共有されていないと信頼というものが結ばれないのです。

私はよく万引きの例で言うのですが、万引きは数年前、15 万件ありました。そして被害総額は 4,615 億円で、そのために閉店になった書店は 1000 軒を越えている。こんな国は世界にありません。子供が万引きをしている家庭はみな共通点があります。それは“大目に見る”家庭なのです。たかがこのボールペン 1 本くらいのことでそんな大したことはないでしょ、お金払えばいいんでしょ、と。親が呼ばれてもそういうふうに平気で答える親がいる。

私、12 月にニューヨークに行ってきました。ルース・ベネディクトという人の「菊と刀」という本がどういう資料で書かれたか研究しているのですが、ニューヨークに行きましたら大騒ぎになっていたのは銃乱射事件です。みなさん、日本でも報道されたから分かっていると思いますが、この銃乱射事件はアメリカでよく起きます。数年前にもテキサス州の学生が屋上から無差別殺人を行いました。この大学生は結婚してまして、どうしても無差別殺人をする衝動が突き上げてきて抑えきれなかった。そこで先ず事件を知ったら悲しむであろう妻を殺し、母も殺し、そして事件を執行したのです。そして遺書を書いていて、自分の脳を調べて欲しい。そしてその遺書の通りに脳を調べたら脳に障害があった。これは福島章という方が「子供の脳が危ない」という本の中で、殺人を犯した少年の脳をずっと調べたものをまとめていますが、その脳には小さいころに障害ができていて、つまり事件が起きるのは大きくなってからですけども、根本にあるのは小さいときの親との関係にあるのだと。

このアメリカの雑誌でも取り上げられているのは親の問題です。お母さんとの関係がどうであったか、つまり家庭環境がどうであったかということが問われるんですが、日本の場合はそれが問われない。あの天津の事件も事件が終わったあと先生が説明して、そのあとクラスの後ろに貼ってあった自殺した生徒の顔写真の上に画鋲をはりながら笑っていたと主犯格の少年たちのことが報じられています。あるいは PTA 会長であった主犯格の少年のお母さんは緊急保護者会で「あなたの家庭に問題があったことは知っていますよ。こんなことでうちの子供に何か起きたらどうしますか」と食ってかかったと報じられています。つまり親にも子にも痛みを感じるという心がなかった。あるいはいじめは人間として絶対に許されないという規範意識がない、育っていなかった。

私はイザヤ・ベンダサンというペンネームの山本七平さんという方と臨時教育審議会でお話したのですが、彼がいつも言ったことは、親子に共通の価値規範がないと信頼というのは生まれない、ということでした。

「朝まで生テレビ」の最初の3本柱に予定されていたのは、日本を取り戻すってどういうことだというのが大きな柱であり、これは安倍首相が一貫して日本を取り戻すということが政権公約にも載っておりました。でも、日本を取り戻すってなんだ？何を取り戻すんでしょう。

日本人は美しい心を持って国を築いてきたのです。たとえば、その1つの象徴は～私はいつも主体変容と言っているのですが～いろいろ災害が起きても責任を転嫁しないで、自分の心を振り返って自分が変わることによって世直しをしてきた。これが日本の精神的伝統です。そういう美しい心をもって日本人は生きてきたのです。ところがその心というのがどんどん見失われてしまっている。少し話が難しくなるかも知れませんが、私たちは戦後の教育をもう1回見つめ直さないといけない。日本人自身が何を失ったということが分かっていない。それで私は明日は富山の親守詩大会に出て、明後日すぐイギリス、そしてアメリカに渡るのですが、何のために今そういう研究を、この親学の活動をしながらやろうとしているかと言いますと、日本が戦後失ったものは何かということきちっとその出発点の歪みにさかのぼって考えないと日本の歴史を取り戻すことはできないと思うからです。それはどういうことか。

今日もテレビで国旗や国歌の話が出ました。何で日本では国旗や国歌のことがいつまでも問題になるのか。世界で国旗を掲揚して国歌を斉唱することが問題になる国はありません。なぜ60年も経って日本でいまだにそんなことが問題になっているのか。それは、日本人の国民性、日本人のモノの考え方に問題があって、それが侵略戦争になったのだという考え方を占領軍はずっとしてきたのです。それを江藤淳さんのことばで「義眼を嵌められた」という。義眼というのは自分の目でないということですね。

たとえば、「君が代」というのを音楽の教科書から文部科学省が削除したのです。それでなぜ音楽の教科書から「君が代」を削除したかと占領軍から問い詰められて、「我々はそういうことを言っていないよ」とこう言われました。あるいは、国旗を掲げさせてほしい、といわれたマッカーサーは国旗掲揚を許可しました。でも誰も日本人は国旗を掲揚しようとしませんでした。あるいは武道を禁止しました。なぜ武道を禁止したか調べてみたら、軍国主義者だ、というのです。今朝のテレビでも教育勅語のことを田原さんが取り上げました。教育勅語の文言をずっとパネルにしまして、そして夫婦相和し、というふうに書いてありますことを読みながら、どう思いますかというふうに向けてきたわけですが。

実は1942年、もう戦争に負ける3年前にアメリカは日本の修身(今の道徳)の教科書を全部翻訳し分析しているのです。それを僕はアメリカで読んでみたらこう書いてありました。「日本の修身の教科書は、親孝行とか愛国心とか書いてある」でもそれはどこでも教えていることなのです。昭和16年から軍国主義とか超国家主義になったが、そこだけを排除すればいいんだと書いてあるのです。ところが日本はその修身の教科書とか教育勅語もみなさん若いから読んだことないかも知れませんが、ずっと読んでみるとみんな普遍的な

道徳が書いてあるのです。そして羽仁五郎という方が、1カ所だけ「一旦緩急（非常時）アレハ義勇公ニ奉シ」という、ここが軍国主義じゃないかと問題にしたのです。でも一旦国家が非常事態になれば義勇公に奉ずというのはどこの国でも教えている愛国心なのです。そしてその占領軍の方たちがアメリカで研究してきたものの中にもそういうふうになんと書いてあった。でも日本人はどうしてそういうものを失ってしまったのか。美しい日本人の心とか国民性というものに自信を失ってしまった。だから敢えて取り戻す。日本を取り戻すということをする必要があったわけですね。

でも多くの方はなぜこの日本を取り戻す、これは後ろ向きではないかと、毎日新聞にもそういう大きな記事が載っております。これは逆行か、また過去に戻るのか、こう言っているのですが、そうではないのです。

何のために今、親守詩を全国に展開しているか、それは日本人が持っている美しい日本人の心のベースにあるのは親子の絆なのです。親が子を思い子が親を思う心が失われてしまったら日本の美しい心は崩壊してしまいます。そして、今、何が起きているかと言いますと、家庭の崩壊現象が起きているのです。

アメリカでなぜ虐待が起きたか。先ほどマリー・ウィンのことばを引用したように、親が親としての心を失っていったら子供の心は崩壊していきます。そして今、少しずつ日本にその傾向が見え始めた。児童虐待が急増していることがそれをよく示しています。

家庭が崩壊し始めて、親が、たとえば、いろいろな事件を見ているとね、子供をすぐ殺害して子供手当をもらったというようなことが報じられていますね。あるいは大阪の吹田ではお父さんが小さい子供に物乞いをさせて何千円かを貰う、それを遠くからみていたわけですね。警察官が来て子供を補導して行くと親は逃げた。でも、子供はお父さんは悪くないと言って庇っている。そういう姿が、これはかつて考えられないことです。

山上憶良が「しろがねもくがねも玉もなにせむにまされる宝子にしかめやも」といいました。子供はもう金銀財宝よりも大事な宝だ、生まれてきてくれてありがとう、あなたが存在することが宝。つまり存在を喜ぶ。これが親心の特徴だったのです。しかし、そういう思いが少しずつ崩れ始めています。そして逆に親を思う心の代表は吉田松陰の辞世の句です。「親思う心にまさる親ごころ今日のおとずれ何ときくらむ」処刑に赴くときにその知らせを聞いて親がどんなに悲しんでいるだろう、と察した。その「子供が親を思う思い、その親と子の情というものが日本を支えてきた」と岡潔（数学者）は言いました。その日本を支えてきた親と子の情というものが崩壊し始めたら、一気に教育の根っこが枯れていってしまいます。教育再生というのは枝葉の制度改革ではもう実現しないと私は思っております。教育の根が枯れ始めている、幹が腐りかけている、その根と幹にあたるものは家庭なのです。そしてその家庭で芽が出なかつたらどんなに学校で先生が頑張っても、芽が出ないものに花を咲かせようがないのです。ですからもっとも大事なことは、今家庭をどう再建するか、家族の絆をどう取り戻すかということです。

そういう中で少しずつ大きな変化が生まれてきております。それは東日本大震災の後ですね、様々な統計が発表されていますが、たとえば、子供が3歳くらいまでは母親は育児に専念すべきだ、と答えた方は20代で82%ですね。伝統的な家族観に回帰する兆しが見られるとして記しています。先日朝日新聞でしたが、1月9日・10日の2日にわたって、夫は外で働き妻は家を守るというのに賛成する人が増えてきた、20代が特に顕著に変わってきたと。

今まで日本の教育は「男女共同参画 はじめの一步は家庭から」というのが全国に配られて、男らしさ女らしさを押しつけてはいけません、看護婦は看護師に、家内は妻に、というふうに全部ことばを言い換えてですね、そして男と女の区別はどこに根拠があるのか検討する必要がありますというようなことが書いてあります。男と女は脳に性差があるのです。どういう色を好むか、どういうおもちゃを好むかは生まれつき決まっています。ところがそういうものが差別につながると言ってひな祭りや鯉のぼりが男女平等に反するという名のもとに中止にした幼稚園が全国に26園あります。男女混合騎馬戦をやった中学も180ある。そういう中で少しずつ日本の歴史や文化や伝統の中にあった美しい日本人の心というものが失われていきました。

男女共同参画会議というのがあるのですけれども、5年おきに計画を作っております。第3次計画が2年ほど前ですか、福島瑞穂さんが大臣のときに作られました。その5年前に、これは山谷えり子さんが政務官でお作りになった、その中で、男らしさ女らしさと日本の伝統文化というものを否定するものではありませんというふうに書いたのですが、5年後には大きく変わりました。そしてそれは家庭からそういうことを押しつけちゃいけない、男らしさ女らしさを言っちゃいけないんだと、そして神話、日本の国産み神話に、男女差別の原点があるというわけで、男らしさ女らしさ、男と女の役割を入れ替えて、お爺さんは川へ洗濯に、お婆さんは山へ柴刈りに、こういうことが教育委員会から言われる県まで出てきたわけです。

そういう中で段々と日本らしさ、美しい日本人の心というものが見失われつつあります。もう一度私たちが美しい日本人の心とは何なのかということ問い直してみる必要があります。

私は、新教育指針—歴史の話になって恐縮ですけども—この教師用指導マニュアルに注目してしまっていて、こういうことが書いてあるのですね。「なぜ日本が戦争になったかを振り返ってみよう。その原因は日本人のものの考え方に原因があるのだ」と。つまり日本人の国民性に原因があるのだと。それを世界に向かって謝罪する必要があるということが書いてある。先生方はそれを一生懸命輪読しながら30万部売れて、そこから戦後教育が始まりました。そして、ルース・ベネディクトの「菊と刀」。彼女は日本にやって来たことはないのですけれども、力作という意味で素晴らしい作品を書いています。しかし、残念ながら大変な偏見と誤解がそこにあるのです。それを私は今、一次資料にあたって本にしようとしています。どういうことかと言うと、1944年の12月16日・17日に、太平洋問題調査会がニューヨークで開かれたのです。そこで日本人の性格構造について40人の専門家

がやって来て分析しました。結論は何か。日本の伝統的子育てが不安や恐怖感をお子に与えてそれがトラウマとなって勃発したのが侵略戦争だと。こういう結論なのですね。彼らがなぜそういうふうにお考えたのかということをお、私は今一生懸命調べているのです。つまり何が言いたいかと言くと、日本人の価値観、倫理観、価値体系、倫理体系、これが軍国主義や戦争につながっているというのは間違った考え方だということなのです。しかし、日本人は戦前の日本の道徳観、倫理観、そういうものに対して自信を失いました。あるいは武道を禁止したのも、武というのは矛を止どむという意味で平和の精神。いつでも抜けるけれど抜かないというのが武の精神ですね。でもその武道はなぜ禁止されたかと言くと軍国主義だと占領軍の文書には書いてあります。実は、軍国主義、超国家主義、ちょっと難しいことばですが、これがキーワードなのです。

日本を占領したときにアメリカの大統領のルーズベルトという人は、敵国の哲学そのものを破砕すると言いました。日本の哲学を破砕するというのが占領政策の目的でした。そしてバーンズ国務長官は精神的武装解除を行った。つまり精神的武装解除、日本の哲学の破砕、それから、日本の倫理道徳、国民性そのものに原因があって侵略戦争になったんだという、それを刷り込んでいったのが「太平洋戦争史」という歴史であるし、「菊と刀」という本であるし、あるいは愛国心そのものを否定する教科書の検閲を行いました。愛国心そのものを否定した国はありません。ドイツはナチズムというのは反省しましたがけれども、ドイツの歴史、文化、伝統に対する誇りは失いませんでした。なぜ日本は日本を取り戻す必要があるかと言えば、その軍国主義や超国家主義のレッテルを貼られて、それと一緒に愛国心そのものを危険だと思うようになった。教育勅語や修身の教科書に書かれた普遍的な道徳、日本の伝統的な倫理体系、道徳体系まで、これが間違いだというふうにお刷り込まれた。そして自信を失った。その結果、道義国家と言われていた日本は町人国家になってしまった。経済の物差しでものを考えるようになった。

そして今、これは私、安倍政権で大議論していきたいと思っておりますが、経済の再生ということと教育の再生ということをどうつなげていくかということ、これは大問題なのです。たとえば分かりやすく言いますと、待機児童ゼロ作戦をずっとやってきました。0歳1歳この小さな子供を保育所に預けようという施策を展開してきたのです。でも保育サービスを充実する、延長保育とかだんどんサービスを充実すると、だんどん待機児童が増えるのです。これ、矛盾しているのです。みなさん、分かりますでしょうか。

この政策はどこから来たかと言いますと、女性を働かせて税金を納めさせた方が得だという経済戦略なのです。そして今、女性の労働力をアップして税金を納めさせたら、経済が活性化するのじゃないかという議論も一方で起きています。それで本当にいいのかということをお私はあえて問題提起したいと思っております。つまり経済の物差しから幸福の物差しを取り戻す。

何のための親守詩かと言えば、子供の幸福はどこにあるかということ、親と子の絆、人間関係のぬくもり、暖かさの中にあるということが子供の幸福度調査でわかっています。これはユニセフのイノチェンティ研究所の調査なのですね。子供はお金があることに幸せを感じていません。経済力と子供の幸せは関係がありませんということが分かっています。

ブータン国王がやって来て GNH（国民総幸福量）ということ提唱しました。ハピネス—その幸福の物差しはどこにあるか。それは心の絆、ぬくもり、暖かさです。それをどんどん破壊しているのが今の保育政策であり、男女共同参画や少子化対策です。女性をどんどん働かせて、そして税金を納めさせたら経済が活性化する、そういうことで果たしていいのかということが、今私は日本が真っ正面から議論しなければならないことではないかと思っております。

今日は少し難しい話になりましたが、もう1つ、香川県の最優秀作品で感動したものがございます。これは「夢の人」という題です。中学校1年生の女の子です。

「『尊敬する人は1位が父母』私の好きな新聞のコーナーの中にこんなランキングが書いてあった。このランキングは、現代の香川の子供を対象にしたものであった。私はそのとき、当然だと思った。でもよく考えてみると、これはすごく嬉しいことだということに気付いた。なぜなら、尊敬する人が、私の夢の人が、一番近くにいて見守ってくれる人だからだ。私自身も両親を尊敬している。母のような母になりたい。父のような優しさを持ちたい。そんな夢の人が自分のそばにいるということは、嬉しくそしてありがたいことではないかと思う。お父さん、お母さん、私の夢の人でいてくれてありがとう。これからも夢の人でいてね」

まず親が、身近なお祖父ちゃんお祖母ちゃんでもいいのですけれども、その夢の人になること、これが子供が夢に向かう一番の近道だと思っております。

今、この親守詩が全国に広がっておりますが、私が懸念していることが1つあります。それはコンクール化していくことです。親を思う気持ち、子を思う気持ちに優劣はありません。ですから、1等賞2等賞3等賞というのを決めるのは、その、たとえばたくさんの作品を紹介しながらそこにみんなが何かを感じて、そして心が温かくなっていく、そういうものが目的でありまして、表彰式が終わったらサァッと帰って行くようなコンクールはあまり意味がないことなんです。

つまり何のために親守詩の大会をやるかと言えば、表彰することが目的ではなくて、その多くの作品の中からみんなが何かを感じて、そして心に温かいものを感じて、また、さらに親と子の絆を深めようというふうにみんなが考えていく場にしていくことが大事だと思っております。

今年は10月20日に東京のビッグサイトで全国大会をやることが決定しております。すでに500人近い人たちを集める予定でありますが、東京で親守詩の普及委員会というのを作っております。ここは先生の組織の代表が入っております。TOSSの向山先生が入っております。そして青年会議所の代表が入っております。そして私も入っておりますが、さらにそこにキッズマナーといいまして、小笠原礼法の家元が、お母さんに礼法を教えて、30分教えたらすぐ子供が入って来て、その親がもうまた自分が先生のように親が教えるという、これが全国に広がっているのです。そういう団体、あるいは今後はモラロジー研究所、倫理研究所、あるいはおやじの会、それからPTA、それぞれに働きかけて、厚生労働省、文部科学省、内閣府、そういうところを連携しながら、この親守詩はイデオロギーを越えるのです。沖縄では、八重山青年会議所が、石垣島、石垣市、与那国町、竹富町と

いう、教科書では対立したところが全部賛成して地元の新聞もテレビも大きく取り上げました。沖縄全体でやろうと、今盛り上がっております。東京都も全体で青年会議所あげてやろうということに今なっております。是非この親守詩が教育界を再編していく新しい教育の流れを作っていく1つの国民運動として、親と子の絆を核にして新しい、温かい、心のぬくもりを作っていく、そういう意識改革の運動として広がっていければ願っております。

今日は表彰式で表彰を受けた方たち、大変おめでとうございます。そしてこれを機に、またさらに親と子の絆が深まって、この松山から親守詩は始まりましたので、是非、みなさんがこの親守詩を全国に向かってさらに発信していただくことを祈念いたしまして基調講演とさせていただきます。ありがとうございました。(48:30)

【文責 めざす会】